



TITLE:

市民主義・國家主義・國民主義

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. 市民主義・國家主義・國民主義. 經濟論叢 1933, 37(4): 485-504

ISSUE DATE:

1933-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130364>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號 四 第

卷七十三第

行發日一月十年八和昭

論 叢

貨幣效用の測定について……………文學博士 高田 保馬

企業と租税負擔……………經濟學博士 汐見 三郎

市民主義・國家主義・國民主義……………經濟學博士 石川 興二

時 論

地租改造の一案……………法學博士 神戸 正雄

研 究

資本蓄積と資本の有機的構成變化……………經濟學士 柴 田 敬

金の意義に就いて……………經濟學士 松岡 孝兒

出張販賣より見たる百貨店對小賣店の抗爭……………經濟學士 堀 新一

說 苑

企業の豫算期間について……………經濟學士 山本安次郎

販賣組合における價格の決定方法……………經濟學士 吉 木 信

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

市民主義、國家主義、國民主義

石 川 興 二

一

現代社會問題に對する社會思想は多種多様である。然しこれを原理的に考察するならば、それは限られた基本型に歸することとなる。而して複雑多様な社會思想はこの基本型の特殊型として、または複合型として明確にし得るのである。

社會思想の基本型も様々に考へられるであらう。資本主義の現状維持論の立場に對して、空想的社會主義の立場を對立せしめ、これを統一綜合するものとして科學的社會主義の立場を考へるは、社會主義者に於て見られるところである。この社會主義の立場を無產者階級思想とし、これに對して有產者階級思想である資本主義の立場を對立せしめ、この兩者に對する「合」の立場として國家主義を考へるは國家主義者に於て見られるところである。

然しながら更に進んで考へて見るならば、所謂個人主義の立場も資本主義の立場もまた社會主義の立場も總て個體主義の原理に立てる市民主義の立場に屬するものである。これ等のものは市民主義の中に於ける區別にすぎない。而して社會主義はその最も具體的なものである。市民主

義が個體主義の原理に立つて居るに對して、國家主義は全體主義の原理に立つて居るものである。故に國家主義は市民主義に對立するものであつて、これを止揚して居るものではない。而してこの相對立せる市民主義と國家主義とを止揚綜合すべき眞に具體的な立場は、個體主義の原理と全體主義の原理とを止揚したところの總體主義の原理に立つて居る國民主義の立場である。

かくは私は以下この辨證法的關係に於て、市民主義と國家主義と國民主義とを原理的に考察して見たいと思ふ。

市民主義と國家主義と國民主義とが社會思想の基本型である以上、それは既にギリシャの昔に於て見られた。即ちその各はソフィストとプラトーンとアリストテレスとによつて代表せられたのである。然しながら現代に於てはこの三者の立場は更に複雑なる發展を果けると共に、更に嚴密なる基礎付を要するのである。即ち一つの社會思想體系が學的に確立せんが爲めには、それは哲學的に基礎付けられて居らねばならぬのであるがこの哲學的基礎はその歴史觀に於て最も具體的な表現を有する。かく哲學的に基礎付けられて居る一つの社會思想體系は更にその基礎に於て生的基礎を有する。即ちそれ等の思想體系は生の構造の中に於て最後の基礎を有して居る。而して各體系を基礎付けて居る歴史觀なるものも生の構造の中にその根柢を有して居る。かくて市民主義、國家主義、國民主義を原理的に考察せんとせば、先づ生の構造の中に於てその最後の根柢を求めなければならない。

この三者の最後の基礎を生の構造の中に明にしたる時、我々はこの生的基礎より出て、各主義の哲學的基礎を理解し、而してこの生的基礎と哲學的基礎よりして各主義の主張を原理的に考察し、理解し得るのである。かく理解してはじめて各主義の限界を明にし眞にこれを批判することが出来る。かく批判してはじめて一面的なるものを止揚綜合し眞に具體的な立場に到達し得るのである。¹⁾

二

市民主義、國家主義、國民主義の三者が社會思想の本質的な基本型として而も辨證法的關係にある所以は、それ等のものが生の辨證法的構造に基礎づけられて居るからである。先づ其ことを一應明にして置かう。

この生の構造は全實在の根本構造として考へることが出来る。即ち總て實存するところのものは本體として存在する。而して本體は自立的に存在するものであつて、それに於ては必ず形相と素材との二つの契機がある。即ち本體なるものは素材が形相によつて統一されて居るところのものである。而して素材とは形相によつて統一されて居るところのものであり、形相は素材を統一して本體たらしめて居るところのものである。²⁾例へば一つの家なるものは、木材等他の素材が一定の形相によつて統一されて居るところの本體である。

このことは社會的實在についても同様である。即ち社會的實在もまた素材が形相によつて、纏

1) 拙著『基精神科學的經濟學の基礎問題』第三四頁以下參照
2) 同書第一〇四頁以下參照 Aristotle, *Metaphysica*

められて居るところの本體であつて、素材と形相とをその契機として居る。而して社會的素材は究極に於て諸個人であり、社會的形相はこれを統一して居るところのものである。今人類の歴史を顧みるに、人類は常に國民的社會に於て生活して來たのであつてこれが最も自主的本體的なるものである。而して家庭其他の社會の存在はこれを前提として居るのである。この國民的社會もその社會的素材としての多くの個人がその社會的形相としての國家的形相によつて統一されて居る本體である。故に其人間生活を考察するに當つて、國民的社會の素材を原理とするものと、その形相を原理とするものと、この素材と形相の統一としての本體を原理とするところのものとの三つの思想體系の型が分たれ得るのである。第一のものに於てはその素材たる個人が原理とせられるものであるが故にそれは個人主義又は市民主義又は個體主義と云はれ得る。第二のものに於ては全體を統一する國家的形相が原理とされるが故に國家主義又は全體主義と云はれ得る。第三のものに於てはこの素材たる個體とこの形相たる全體との内面的に統一された總體としての國民的存在が原理とされるが故に國民主義又は總體主義の立場と云はれ得る。かくてまた第一のものは個體 *Einzelheit* の立場であり、第二のものは全體 *Ganzheit* の立場であり、第三のものは總體 *Totalität* の立場であると云ひ得る。^{c1)}

かく國民社會の本質は、素材と形相とを止揚せし辨證法的構造を有するものなるが故に、その發展もまた辨證法的構造を有して居る。而して社會思想の基本型たる三主義は、この國民的社會

の辨證法的構造に立脚して辨證法的關係を有すると共に、この三主義の發展もまた國民的社會の辨證法的なる發展的構造に基いて辨證法的關係を有して居るのである。次に進んでこのことを考察して見よう。¹⁾

三

人間社會の史的發展の初めに當つては、ヘーゲルの云へるが如く、人間精神は未だ自然の中に沈潛して居るのである。この段階はヘーゲルの云へる意味に於て人類の前史であると云ふことが出来る。²⁾ 即ち自覺せる人間精神に於ては精神の實踐性が具體的な構造を完成して居るが故に人は智性に於て事物を認識し、この認識せるところのものを情に於てその自覺せる價值標準に従つて價值判斷し、價值ありと考ふるところのものを意志に於て目的として打ち立て、これを實現すべき方策を確定し、かくてこの思惟に基いてその目的を實現する。かく自己の價值判斷に基いて行動することが人間精神の合目的性である。³⁾ 然るに自然狀態に於ける人間にあつてはこの智情意が未だ感性な未分の狀態に於て本能として存して居る。即ちこの原始社會に於ては、この本能的なる感性の上に家族並に部落社會が成立つて居り、人々は未だ自己の自覺に達して居ない。従つてこの自然的社會に於ては個體と全體とが未分前の狀態にある。

人間發達の最初に於けるこの自然狀態より人間生活を明確に區別するところのものは、ヘーゲルの云へるが如く、國家の成立と云ふことである。而してこの最初の國家なるものは封建的國家

1) この三者の體系的なる辨證法的關係については前掲拙著第二二頁以下並に第一〇九頁以下參照。
2) 拙稿『ヘーゲル史觀の實踐的構造』本誌第三十六卷第五號第四九頁。
3) Dilthey V. S. 207. 參照。

として完成したのである。この封建的社會に於ては云ふまでもなく、國家的全體の原理が支配して居る。即ちそこに於ては全體を統制する國家的意志が支配的壓倒的であつてその社會の素材たる個人に於ては未だ個體の原理なるものが醒ざめて居らない。かゝる全體と個體との關係は當然に命令服從の關係である。即ちこの段階に於ては各人は國家の命令に服從して行動するのである。かゝる狀態に於ける人間は自然狀態に於ける人間とは異なり既に或價值意識を有して居る。然しそれは全體の命令であると云ふことを以て價值ありとするところのものである。故にそれは尙ほ他律的無自覺的な價值意識であつて、未だ自覺的自律的な價值意識ではない。要するにこの段階に於ては個體が全體の中に没して居るのである。

中世の支配的な原理はかくの如く全體的統一の原理であり國家意志の原理であつたが、近世の支配的原理は個體的分裂の原理であり個人の利己的打算の原理である。而してかゝる個體の原理は中世の城下町に於ける商工人に端を發した。これ *Burg* に於ける *Bourgeois* 市民の活動である。この個體の原理が次第に高まり行くにつれ、全體の原理と個體の原理との分裂對立がはじまるのであるが、其初めにあたつては全體の原理が尙強くして個體の原理に君臨して個體を支配せんとする。中世的社會より近世的社會への過渡期であるところのかくの如き生の構造に基いて成立したところの思想體系が重商主義である。従つてこのものは未發展ではあるが、國家主義の思想體系に屬するものである。

かく生の構造の中に於て全體の原理と個體の原理とは分裂對立して行く。然し個體の原理は新に高まり行く原理であるに對して、全體の原理は古き衰へ行く原理である。この新に高まり行く個體の原理の立場に立つて、打立てられたるものが重農主義の體系である。故にそれは未發展ではあるが個人主義的な思想體系に屬するものである。

かく相對立せる商重主義の國家主義的體系と、重農主義の個人主義的體系とを「正」「反」となし、これに對する「合」の立場に立つて兩者を止揚するより具體的な體系を打立てんとせしものはアダム・スミスであつた。即ち彼は中世的なる全體主義の無自覺なる支配を排除し今や高まつて行く個體の原理に信賴すると共に、また全體の原理の自覺的な支配はこれを必要となし、以て兩原理を鹽梅して新なる國民的社會を實現せんとしたのである。

然しながら全體の原理と個體の原理とが分裂しつゝあるところのこの段階の生の構造に立つて居たスミスの體驗になれるこの思想體系に於ては、全體の原理と個體の原理とは眞に内面的に統一されることは出来なかつた。兩者は只だ外面的に調和されんとしたのである。而もこの段階の生の構造に於ては個體の原理が新に高まりつゝある原理であり、中世的なる社會的弊害を排除しつゝある原理であつたが故に、自からこの個體の原理に強き信賴が與へられた。かくてスミスが實現せらるべき理想社會としたところの『自然的自由の體系』the System of Natural Liberty は國民的單位の社會であるが、而しそこに於ては個體の原理が重氣をなして居るのである。かくてス

ミス¹⁾を直に他の個人主義の體系と同一視せんとすることは正當でない。即ち個人主義の體系に於ては次に述べるが如く、各個人の自由なる經濟的活動が自ら全體の利益と一致するとするのであるが、スミスはこれと異なり、私利と公益との矛盾する多く場合を擧げてゐるのであつて、その『自然的自由の體系』に於ては各人の經濟的自由を全體の「正義の法を冒さざる限り」に於て認めて居るのである。彼がその大著の名題に於て the Wealth of Nations (諸國民の富)とせることも彼が國民單位を重んずることを示めせるものであると考へることが出来る。かくて彼は所謂個人主義者又は市民主義者と異なり、この段階に於て國民主義の體系を立てんせしものである。而も眞に具體的な國民主義の體系は、この段階の生の構造に於ては未だ成立し得なかつたのである。

かくて國家的全體の原理と個人的個體の原理とが分裂しつゝあつたこの段階の生の構造に基いて、國家主義、個人主義、國民主義の體系が成立つたのであるが、而もそれは何れも不完全なるものであつた。而してこれ等の三種の體系が完全に成立つたのは、この段階に於て分裂しつゝあつた全體の原理と個體の原理とが一應その分裂を了へ、個體の原理が明確なる發展を果せば個體社會が相對的獨立の域に達した後であつた。

かく個體の原理が高まり全體の原理が衰へて一應その分裂を了へたこの段階の生の構造の中にあつて、初めて個人主義的經濟學體系が確立されたのである。それは個人主義的社會の最も發達せし英國に於てユダヤ人リカルドオによつてであつた。即ち幼小より株式仲買人としてこの段階

1) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第三編參照

に於ける生の構造の中に於て個體的原理の働を深く體驗した彼はこの體驗に基きアダム・スミスの學的體系の中に於ける個人主義的方面を發展せしめたのである。これ以後個人主義の經濟學は英國を中心として連綿たる學派を形成したのであるが、それはリカルドを祖述しまたリカルドオを通じてスミスに於ける個人主義的部分を展開せんとせしところのものである。この人々とつてはスミスも單なる個人主義者として見られたのである。

この個人主義的體系に於ては人間の本質は個體的原理に於て把握される。これ市民社會に於ける經濟人の構造を本質化し普遍化したところのものである。かくて人間の本質は専ら自己の經濟的利益を價值標準として行動するものとなる。これ個人主義的經濟學の *economic man* 經濟人の概念である。即ちこの經濟人の概念は近世的個體的原理を典型化せるものであると云ふことが出来る。而してこの個人主義の社會觀に於てはかゝる個人の集合としての個人主義的社會をもつて社會の本質的なものであり國家もまたこれと本質を異にするものでない。而してこの社會に於ては人々が自己の私利を求めて行動することは自ら社會の公益に一致するものであると考へられた。而して國家の責務は個人の經濟的自由を保持することにあつた。かくの如き哲學的基礎の上に打立てられたところのものが即ち個人主義的經濟學の體系である。

個體の原理は、中世の全體的統一の原理と反對に、分裂の原理である。故に個體の原理が高まつて來るところに於ては、先づ個體の原理が全體の原理より自分を分離し而して個體相互を分裂

せしめかくて個人主義的社會を相對的獨立の状態に高めたのであるが、進んでこの個人主義的社會自體をその中に於て決定的に階級的に分裂せしむるに至る。これ即ち個人主義的社會の最も具體的な發展形態としての資本主義社會である。この生の構造の中にあつてマルクスは、個人主義社會がそれ自身の原理より必然的に有産者無産者の階級對立に分裂するに至る所以を明にし、且つこの資本主義社會の構造を明確に把握せんとしたのである。

即ち鋭きユダヤ的頭腦を有するマルクスは、彼の所謂「ユダヤ的精神」を原理とする資本主義社會なるものゝ典型的發展を成せる英國の高度市民主義社會の構造の中にあつて深くこれを體驗し、而もこの社會の分裂的立對的本質をヘーゲル哲學の辨證法的方法によつて明確に把握し、かくてリカルドオの個人主義的經濟學體系を發展せしめ以て社會主義經濟學體系を確立したのである。

かくて市民主義社會の最も發展せる形態としての資本主義社會の構造を明にするところのマルクス經濟學は、この意味に於て市民主義經濟學の最も具體的な體系であるのめならず、またそれは哲學的基礎付の整へる意味に於ても最も具體的な體系である。而してこの哲學的基礎の骨子は所謂マルクスの唯物史觀である。

この唯物史觀なるものは、彼が體驗せし高度市民主義の段階に於ける生の構造を、これまでの人類史全體の本質的構造として普遍化したところのものである。即ち高度市民主義時代の生の構

造に於ては個體的原理が高潮に達し個人主義的社會自體が決定的に階級分裂に至ると共に、國家的原理は反對に最も弱くなつて居る。かくて階級的に分裂對立せる經濟社會の構造は國家的意志のみならず一切の文化を決定するかに見えた。而してこのことは代議政治の最もよく發達してゐた英國に於て特に著しかつたのである。この高度市民主義社會の構造を普遍化し本質化したマルクス史觀に於ては、人類の經濟的關係なるものは常に階級的に分裂すべきものでありこの階級に分裂する「社會の經濟的構造」なるものが社會全體の「眞實の土臺」となりて他の一切の文化を規定するのであり従つてまた人類の歴史は階級闘争の歴史であると云ふことになる。

かくの如き立場に立つたマルクスはこの資本主義社會の變革を個體的社會の原理のみによつて考へんとしたのは當然である。即ち個人主義的社會は必然に階級的に分裂し資本主義社會となりこの階級對立によつて種々の不合理が起るのであるが、この階級對立を階級闘争のみによつて解決せんとするのである。かくして階級對立が解消せられるならば、そこに『自由の王國』*Reich der Freiheit* が實現されると考へたのであるが、この社會は自由なる個人の結合であつて、個人主義社會の矛盾たる階級對立が合理化された個人主義的社會である。マルクスに於てこの理想社會が國家なき社會であることとされることは個體的原理の徹底されて居る所以である。

社會主義的體系は屢々個人主義的體系に對立せしめられるのであるが、以上明なるが如く、この體系は實は市民的個體主義の原理を極度にまで徹底せるものである。故に個人主義的體系と共に

1) Marx, Kritik der politischen Ökonomie. Vorwort. S. LV.
2) 拙稿『經濟學の認識主觀としての實踐哲學者』本誌第三十四卷第一號

に市民主義の體系に屬するものであるのみならず市民主義經濟學の最も代表的なるものであると云ふことが出来る。故に兩者を本質的に異ならしむるが如くに見えしむる點も、實は同一の市民主義社會の異なる發展段階に基けるが故であつて市民主義的原理を基礎とせる點に於ては全く同一なのである。即ち個人主義體系の哲學的基礎を社會主義體系の哲學的基礎に比較せんに共に市民社會の構造を本質化し普遍化した點に於ては同一であるが、前者の社會觀に於ては社會の原動力は各個人の經濟的利己心であり従つてかくの如き個人主義的社會自體は不變であり安定的である。然るに後者の立場に於ては社會の原動力は階級的に分裂對立せる經濟階級の階級的利己心であつて、従つて社會組織自體がこの階級的利己心の對立的辨證法的關係によつて發展するのである。またその人間觀について見るも、個人主義的體系に於ては人間は利己的打算的な本質を不變的に有するものであるが、社會主義に於ては人間の意識は可變的な社會的存在により決定される可變的なものであり、その社會的存在の如何により次第に完成に向つて進歩し得るものである。かくて兩者共に市民主義的立場に立てるが故に國家的全體の原理を輕視するのであつて、前者は國家を個人の契約的集合として考へ、後者は國家意志を階級的意志に還元した。

高度市民主義の段階は個體的原理が最高潮に達し全體的原理がそれ自身の力を最も多く失つた時代である。而もそれはマルクスの體驗した當時の英國に於て特にそうであつたのである。然しそれだからと云ふて我々が中世に於て支配的な形に於てそれを見また現代の初めに於て個體的原

理が高まつて行くにつれこれに對立してこれを抑制せんと欲したところの全體の原理は今や全く無くなつてしまつたのであろうか。若し全體の原理が個體の原理に還元されてしまふならば、それは獨立の原理とは云い得ない。然し實はそうではない。高度市民主義の段階に於ても全體の原理は個體的の原理と矛盾しない限り支配を續けて居たのみならず、ミススの云へるが如く、この個體的原理の社會もこの全體の原理の支配を待つてはじめて實存し得たのである。既に云へるが如く人類史上に具體的自立的に存在せる社會は常に國家を形成せる社會であつたので、それは本體的社會である。従つてそれは常に統一される個人的素材とこれを統一する國家的全體の形相より成つて居るのである。只だ個體の原理と全體の原理との支配に消長があるのである。それ故に個體の原理の支配が強くなり階級が分裂對立し社會の矛盾が激しくなつて行くならば、全體の原理はそれ自身の立場より次第に強く働き出すのである。かくて初めて勞働立法も作られるに至つたのである。資本主義社會が更に發展して種々なる矛盾を暴露して行くにつれ全體の原理は次第に強まり全體の利益の爲めに國家意志の立場より個體的原理の動きを取締らんとする傾向が益々つよくなる。而も尙ほ支配者階級の私利私欲が節度を知らず露骨であれば、國家的全體の原理が爆發的に實現し來るのである。これが今日各國に實現されんとしつゝあるファッシズムであり、それは一つの專制國家主義である。

然しかくの如き全體の原理は眞に確立されたものでなく、抽象的形式的なものに過ぎないの

である。即ち嘗て國家的全體の原理が支配して居た中世の社會に於ては、この全體の原理は盲從的他律的な個人の意識の中に確立し得たのである。然し今や資本主義によで發展せる市民社會を通して各個人の意識に於ける實踐的構造が十分に發達したるが故に、人々は盲從的他律的に動かされることなく自己の價值判斷によつて行動するのである。而もこの價值意識は個人主義的であつてその價值標準とされるところのものは自己一身の利害である。かゝる個人に對しては國家的全體的な原理は中世社會に於けるが如く諸個人の中に確立され得ないのである。かくて市民社會に於ては國家的全體的なる原理は、社會の個人に對して外より強く迫つて行かざるを得ない。これを全體的の原理の側より云ふならば國家的なる原理は宙に浮んで居るのである。かくて市民社會に於ては國家的全體的なる原理はそれ自身に於て存立する國家意志として形而上學的に考へられることとなる。これが即ち國家主義的體系の原理となるところのものである。

かくて現代社會の生の構造即ち個體の原理と全體の原理との外的對立の當然の結果として、一方に市民主義の體系が成立つと共に他方に國民主義の體系が成立ち相對立することとなつたのである。而も市民主義の體系はマルクスの學的體系に於て最も具體的な形に高められたのであるが、國家主義の體系は前者に於けるが如き確然たる學的體系とはなつて居ない。然しながら、この國家主義の體系は、市民主義の體系の哲學的基礎たるマルクスの市民社會史觀に劣らぬ偉大な哲學的基礎を有して居る。それは即ちヘーゲルの國家史觀である。即ちヘーゲル史觀に於ける

最大なる精神は世界精神であるが、然しその史觀に於て實際に取扱はれて居るところの實體的原理は國民精神である。¹⁾而してヘーゲルに於ては精神は意志の本質に於て把握されて居るが故に、國民精神は結局それ自身獨立なる實體としての國家意志である。而してこの實體的原理の實現したところのものは「國家」*Staat*である。而して各の國家の成員たる個人はこの國民精神實現の手段でありまた法に従ふことを以て人間の本質的自由としてゐる存在たるにすぎないのである。要するに彼の國家論はその本質に於て、彼が體驗せし當時のプロイセンの專制國家を形而上學的に基礎付けたものである。

かくの如き形而上學的基礎に於て現代社會問題に對し打立てらるべき思想體系は、無自覺なる中世的人間はいざしらず、自覺せる現代人を首肯せしむべき十分なる力をもつていない。かくてこの國家主義なるものは理論的に無力となり、徒らなる專制強壓主義に走らんとする傾向を有するのである。

要するに此主義は、社會主義が社會に於ける全體の原理を無視すると反對に、個體の原理を無視し自覺的な現代人に對し一方的命令服従の關係に於て望まんとするものである。即ちその用ゐんとするところの權力は個々人の理解に立たずして只だ外部よりこれに壓迫的に臨まんとするのである。かくの如き權力は不安定である。故に愈々壓制を加へて暴力的に政權を保持せんとし遂に根柢より崩解するに至ることは多くの專制主義に共通なる運命である。従つてかくの如き形

1) 本誌、第三十六卷第五號拙稿『ヘーゲル史觀の實踐的構造』參照

式的な、國家主義をもつてしては眞に國民全體の爲めの支配をなすことが出來ず。反つて個體的社會に於ける支配者階級の手段となり終る場合が多いのである。

四

個體と全體とが分裂對立して居る現代の生の構造に於て市民主義は個體の原理を徹底せんとするものであり、國家主義は全體の原理を徹底せんとするものであるが、個體の原理と全體の原理とを眞の內面的統一に齎らんとするものは即ち國民主義である。このことを明にせんが爲めに、先づ國民主義の立場に於ける個體並に全體の本質觀を明にしよう。

先づ個體の本質觀即ち人間觀について述んに、市民主義の立場に於ては人間の本質は要するに個人的理智的打算的なものとして把握されて居り、これに對して國家主義の立場に於ては各個人は超人間的なる全體的意志に服従するものとして把握されて居るのであるが、國民主義の立場に於てはこの個人主義人間觀と全體主義人間觀との對立を止揚し、人間各自の意識に内在するところの超個人的なる原理が認められるのである。それは即ち人間愛である。

人間は精神的存在であると考へられるのであるが、然しこの精神的存在は自然と對立する抽象的な純粹精神 *der reine Geist*¹⁾ ではなく、自然をその中に止揚して居る具體的な精神である。故に人々の精神の根柢には共同的な血族的並に地理的の自然的構成に規定されて居るところの自然的な心即ち本能が存する。即ち人々の精神の根柢には、家庭的なる自然的構造を共同すること

1) angel(天使)と云ふ如きものはかゝるものとして考へられる。

によつて家庭愛がまた郷土的なる自然的構成を共同にすることによつて郷土愛が、それぞれ本能的に存在する。前述せし原始社會はこの上に成立つて居るのである。更に人々の精神の根抵には國民的なる自然的構成を共同とすることによつて國民愛が本能的に成立する¹⁾。かくの如き原始的本能愛を嘆美しこの上に再び人間社會を打立てんとする復古主義論者は今日少くない。然しかゝる本能愛なるものは人間精神に根深く打立てられて居るものであるが、而も本能的盲目的なるものである。故に眞の人間社會なるものはこれを無視して打立て得るものでないが、而もそのまゝの自然愛の上に打立て得られるところのものではない。例へば本能的なる家庭愛は人間精神に於て根深きものであるが、而もそれはそのまゝの状態に於ては所謂舐慣の愛であつて、自己の本能にかられて盲目的に子愛するにすぎない。その結果は子供の人格を損ふこととなる。眞の家庭愛なるものはこの本能愛を根柢としてそれより發すのであるが、而もこの本能愛が自覺に高められたところのものでなくてはならない。これが眞に人間的なる家庭愛である。而して人間的なる家庭愛は本能的なる家庭愛と反對に子供の人格を尊重し子供をして眞の人間たらしむる爲めに子供を眞に愛するのである。即ちそれは人間愛であり人格愛である。而もこの人格愛は本能的家庭愛に深く根ざして居るのであつて、云はゞ本能愛の徹底したところのものである。即ち愛なるものが自然的直接的なる状態にあるのが自然愛でありこの愛が自己を徹底して自覺に高まつたものが人間愛である。眞に人を愛すると云ふことは、その人に於て最も價值あるもの即ちその人格

1) こゝに我々はヘーゲルの自然精神 Naturgeist を考へることが出来る。Hegel Rechtsphilosophie § 391 以下

をその精神的本質を尊重し而してこれを完成せしめんと努力しなければならないのである。このことはまた國民愛にとつても全く同様である。即ちこの自然的なる國民愛が眞に人間的自覺に高められた時それはその國民社會を構成せる總ての人々に對する人間愛となるのである。即ちそれはこれ等總ての人々を人間として完成せしめんとするところの人間愛である。而してこれが眞の國民愛である。而して眞の愛は實現されねばならないのであるが、各人が各々全體の國民を愛せんとすることは國家的組織を通してのみこれを完ふし得るのである。こゝに國民主義の立場に於ける國家存在の第一の意義が存する。

而もかくの如き自覺的國民愛が國家の成員に實現し得ると云ふことは、長き人類の歴史的發展の結果である。自然的なる家庭愛並に郷土愛が社會生活の地盤となつたことは最初の自然的生活狀態より中世社會に至るまで變りないところである。然るに市民社會はむしろこれ等の自然愛を破壊し、人々を自己一身の打算的理智に徹せしめんとしたのである。而も人性に根深き本能愛は未だ消え果てないのみならず、國民國家の發展と共に國民愛が發達し來つた。今やこれ等の愛が人間的自覺に高められることが必要である。而して人間精神の實踐的構造は市民社會を通して確立し來つたのであるが、今若しその價值意識に於て國民愛が自覺に高められるならば、この國民愛の上に眞に確乎たる國民的活動並に國民社會が確立し得られるのである。而もこの國民愛の自覺は眞の國家生活を待つてはじめて完ふし得る。かくて次に國民主義の國家本質觀を見よう。

市民主義の立場に於ては、國家は個人的利己心又はその發展としての階級的利己心の上に打立

てられて居るものであり個人又は階級利己心を満足せしむべきものである。これに反して、國家主義の立場に於ては、國家は超個人的なる國家意志の上に立てられて居り一方的に個人を支配すべきところのものである。然るに國民主義の立場に於ては、國家は其成員の自覺せる國民愛の上に確立さるべきものであつて、總ての成員をし人間としての完成を果げしむることを以てその使命として居る。故にこゝに於ては經濟、軍事、教育等一切は、この國民の人格的完成の爲めにあるのである。かくてこの國家なるものは國民の愛の上に確立し、而し國民に對する愛の爲め存立するのである。今國家の國民に對する愛を仁と云ふならば、國民の國家に對する愛はこれを忠と云ふことが出来る。而してこゝに於ては國民は國家を媒介としてまた直接に相互に對して人間愛を有するのである。かくて市民主義は個人の打算的理智を原理として國家主義は國家の意志を原理とするに對し、國民主義は國家と人間を最も具體的な本質に於て把握し而して國民愛を原理とするものであると云ふことが出来る。

かくの如き眞の國家即ち國民國家は人間歴史の長き發展を通じて、即ち封建的な專制國家並に分裂的な市民國家を通じて今やはじめて實現し得る段階に至つたのである。

かくの如き人間觀と國家觀とに立てる國民主義の歴史觀は、マルクスの市民社會史觀及びヘーゲルの國家史觀に於けるが如くに、必然史觀たるを得ない。即ち人間社會が自然的狀態より封建的社會に進み、更に市民的個體的社會に進み、更に國民的總體的社會に進むと云ふことは人間史の必然的な發展ではなく、Entwicklungsidealtypus 發展的理想型なのである。即ち人間社會が

最も具體的なる發展を果げるが爲めの正常的なる發展型なのである。故に人間の社會發展の一步に於て、人間生活は墮落すべき可能性を有して居るのである。然るにこの發展が必然的發展法則であるかの如くに感ぜられるのは、その發展を果げたる後よりこれを顧りみるによるのである。かくて現代社會について云ふも同様である、即ち現代に於ては國家的全體の原理と市民的個體の原理との分裂對立し更に市民社會は階級的に分裂對立して居るのである。故にこの生の構造の中には社會主義の云へるが如き階級革命の可能性も存するのである。而して國家主義の主張するが如き專制的國家を將來する可能性も存するのである。更に眞の國民的社會を將來する可能性も存するのである。而してこれ等の可能性の何れを實現せしめ得るかは國民的實踐の如何に拘はつて居るのである。而してかくの如き實踐の構造は「實踐的國民生命史觀」として嘗て述べたところである。國民主義なるものはかくの如き實踐史觀の上に立つて、その最も價值ある社會即ち國民社會の實現に努力せんとするところのものである。

然らば國民主義は如何なる實踐的原理に立つて現代日本の國內並に國外社會問題に處せんとするか、改めてこれを明にしよう。これが爲めには上述せし三主義と國民性との關係をも考察しなければならぬ。

要するに以上に於ては國民主義が、市民主義と國家主義とを辨證法的に統一せる最も具體的な立場でありその中には復古主義さへも止揚されて居ることを明にし、其立場を原理的に明確にすることに努めたのである。

1) 本誌第三十卷第四卷第六號拙稿『思想對策批判』參照
2) 抑も社會上自然的發展を阻むものは實踐史觀の上で得ない故にマルクスは「その社會は、必然史觀は、その社會をもつて短くし且つ和らげらるべき」と述べて居る。 Marx, Kapital Vorrede.